

---

# 癒しの手

宙華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
癒しの手

【Nコード】  
N7260F

【作者名】  
宙華

【あらすじ】  
不思議な力を持つ少女の物語 データを誤って消してしまったので再投稿します

## ブローグ（１） / …能力に目覚めた瞬間

25くらいの女性が料理をしているところだった。

「嬉しそうね、何か「きゃっ！」」

不意に小さい悲鳴が上がった。

悲鳴を上げたのは一人の少女。石に躓いて転んでしまい、膝には血が滲んでいる。

「どうしたの？」

「大丈夫！？」

声を聞いた友人達が心配そうに駆け寄って来る。

「大丈夫！擦り傷よ！」

転んだ少女が笑顔で皆に言う、

皆ほっとしたような表情を浮かべ、歩きながら近寄って来る。

「うわっ痛そう！」

転んだ女の子の元に一番に辿り着いた、

薄い茶髪の少女は気をきかせてハンカチを取り出した。

「美風<sup>みかぜ</sup>ったら、平気よ。こんなの洗えば治るわ」

少女が立ち上がり、泥を払う。

「そう？」

美風と呼ばれた少女は

（結構痛そうに見えるけど、大丈夫かしら？）

と首をかしげながらも、取り出したハンカチをポケットにしまう。

「でも痛そうよ、痛い痛い飛んでけっ」

美風はしゃがんで、わざと真剣そうな顔をして、目を閉じて傷に手をかざした。

冗談を交えつつも真剣そうな美風の顔を見て、少女の顔に笑みがこぼれる。

「あはは、ありが…え？」

突然、さっきまで感じていた痛みが消えた。

傷に視線を戻すと、傷も綺麗に消えている。

「あ！」

声を聞いて目を開けた美風の目に入っただのは、傷一つ無い膝だった。

先程まで血を滲ませていた傷が、綺麗に消えている。

「何だ、怪我が無くてよかったね！」

二人が振り返ると、他の子ども達がいつの間にやら覗き込んでいた。

「違うわ、美風が治してくれたのよ。ね、美風？」

「そ、そうなのかな？」

美風は首をかしげる。

（ただ、痛いのが飛んでけって念じたただけなんだけどな。）

「え？どう言う事？」

他の子ども達は皆顔に？を浮かべている。

「さっきまで傷があつたのよ。」

でも、美風が痛いのが飛んでけって言うてくれたから治ったんだもの。

ありがとうつつ美風！」

「へえ〜？」

ほかの子ども達は、首を傾げながらお互い顔を見合わせる。

「ねえ、今度はここからあの木までまた競争よ！」

別の子がそう言うて走り始め、数人がその子の後に続く。

その言葉で（当の本人達の頭からも）怪我の事は頭から消え、

少し遅れながらも他の子に続いて走り始めた。

後に残された、彼女を転ばせた石にほんの少し、

そつ、ちようど少女が負った傷と同じ程度の傷がついたのには誰も

気がつかなかった。

美風が家の前に着くと家の中から女の人の呼び声が聞こえた。

「美風？帰つたの？」

「はい！優風やかぜ叔母様！」

美風が家へ入るとあったの？」

「はい！不思議な事がありました！」

美風は優風に友達の傷が消えた事を報告した。

「そ、そうだったの……」

「叔母様？顔色悪いわよ？料理作るの手伝いしましょうか？」

「大丈夫よ、不思議な話だから、ちよつとどきどきしただけ……」

優風は胸を押さえながら答えた。

しかし優風はすっかり青ざめて弱々しかった。

だがその顔はとても綺麗で上品だ。

美風のいる村は日過馬山ひすまのふもと、火南かなんの中部にあった。

山以外にはどこへ行っても田んぼや畑や野原、

そして海が広がっている小さい村だった。

村のたいていの男は畑を耕したり漁に出たり、

ごく稀に出稼ぎに行ったりしている。

「叔母様、父さんや母さんは今年も帰って来ないの」

「そうみたいねえ……」

美風は叔母から両親の事を少しでも聞かされていたけれど、

何も覚えていなかった。

両親は美風が生まれてから何年も村へ帰っていなかった。

両親は共に町へ出稼ぎに出ていたからだった。

「皆で一緒に暮らせたらなあ……」

美風は思わず呟いた。

「美風」

と優風は呟いた。

「やっぱり私と二人では寂しい？」

「叔母様？ごめんなさい、そんなつもりで言ったんじゃないわ」

と、優風に抱き着いた。優風が震えていたので美風は不思議そうに

叔母を見た。

美風は幼心にも、

叔母に両親の話しを出来るだけしないようにした方がいいと気づい

た。

そして、なるべく叔母を一人にしない事に決めていた。

叔母に親しい友人は何人もいるが、いつも寂しそうだったから。

そのうちに美風は両親がとつくの昔に死んでいた、

と言つ事だけを知った。

父親にはある問題があつた。それは普通の人には無い力を持っていたこと。

その力とは、怪我した人に手をかざして念じると  
どんな怪我でも治してしまうと言つものだった。

力の事を知つた父親の両親（大金持ちの貴族）は、

父親を気味悪く思いひどく邪険に扱っていた。

父親には兄と妹がいたのだが、何かと比較していた。

しかし父親は普通の人には無い力と共に素晴らしいものを持っていた。  
た。

顔も姿も美しく、男らしく勇氣もあり、とても優しい心の持ち主だった。

父親の兄は両親と同じく弟を疎んじていたが、

優しい妹は一生懸命二人目の兄を勇氣付けた。

父親を余計に疎んじた両親と兄は、

父親を遠くの町の金持ちの娘と強引に結婚させた。

半ば政略結婚だったのだが二人は互いに愛し合っていた。

そして静かな町での生活の中で綺麗な女の子が生まれた。

しかしその力がきっかけで母親の親戚から魔法使いだと疑われた父

親は

母親と無理矢理離婚させられた揚句何者かに殺され、

後を追うように母親も自殺してしまう。

兄の事を深く愛していた妹は、美風を引き取り、

家族親戚と縁の無いこの土地に引っ越して来たのだった。

それ以来美風のよき母親代わりだった。

美風は両親のどちらにも似ていた。

この子の緑がかった美しい黒い目は夢と希望で輝いていた。少し大きくなると、美風は少年のような恰好をして

短い茶髪をなびかせて友達と外をすばしっこく走り回るようになった。

その姿がまたお話に出て来る妖精のように軽やかなので皆は思わず見とれるのだった。

そして美風は快活で優しく素直な心を持っていた。

叔母はいつも優しく、温かく接してくれた。

それで美風も叔母の真似をして叔母にも他人にも優しく接するようになった。

小さい美風は自分の両親が死んだ事を叔母がひどく悲しんでるので、

叔母には幸せになって欲しいと言う気持ちになった。

美風の一番の親友は、漁師の息子で美風と同じ歳の海<sup>かい</sup>だった。

海は子どもながら大人びていて、無愛想で力が強いので評判だったが、

美風にはそんな事もなかった。

以前、海で溺れそうになった美風を助けてくれた事もあり、

美風は海をとて尊敬していた。

美風には他にも学校の友人や近所のおじさんおばさんなどたくさんの友達がいたが、

海が一番好きで、毎日のように海の家へ行つては一緒に遊ぶのだった。

間も無く、美風の身の上に思いがけない事が起こった。

この時、美風はまだ7歳。

## 第一章「2」 / …… 出会い

その日、美風はいつも通り海の家へ遊びに行った。

鬼ごっこをしてからひと休みしていると海のお母さんがやって来た。

「美風ちゃん。優風さんから電話があつたよ。帰って来いだってさ」

美風は慌てて立ち上がった。

「分かりました！海、またね」

「待てよ、送る」

海のお母さんは一人で納得したように笑いを堪えていた。

「どうしたんだろう？叔母様、具合でも悪いのかな」

「おばさん、体弱そうだもんな」

「うん、ちよつと心配」

家の前に着くと、タクシーが一台停まっている。

居間で叔母さんが誰かと話していた。

「何かあつたら、俺のどこ来いよ。またな！」

「うん！」

美風は大急ぎで居間へ向かった。そこには背が高くハンサムな紳士がいた。

叔母さんはいつそう弱々しく見えた。

「私の可愛い美風……」

叔母は美風を抱きしめた。ひどく震えていた。

紳士が自分をまじまじと見つめた。優しい目だ。

やがてゆっくりと優しく言った。

「君が、美風……？」

それから数日、美風は不思議に思うことだらけだった。

叔母さんが聞かせてくれた話は難しくて、よく分からなかった。

（海に相談してみようかな）



その話とは、叔母さんが結婚することについてだった。

美風は叔母以外の親戚と会った事は無いが、

この国の首都である守都鈴<sup>しゅとれい</sup>

にいるおじいさんとおばあさんが貴族で、跡を継いでいる美風の父親の兄が、

いつまでも独身でいる妹を心配して誰かと結婚させるのだと言うのである。

そして美風は伯父と同じく守都鈴にいる祖父母の元へやられるのだそう。

この話を聞かされたとき、美風は顔をしかめた。

「私は、いや。だって叔母様は私のお母様よ。」

それにここには友達がいっぱいいるの。

それに叔母様は私のお父様とお母様が大好きなんですもの。

結婚って好きな人とするものなんでしょう？

ねえ、どうしても叔母様は誰かと結婚しないといけないの？

そんなのおかしいわ」

こう言われても、叔母にはどうする事も出来ないようだった。

叔母さんははつきり言った。

「お前のおじいさんとおばあさん…」

それに伯父さんが守都鈴に来るようになっていいるのです。

そしてわざわざお迎えの方が来たのですから、行きましょう」

美風は考え込んでしまった。叔母さんも悲しそうに言った。

「お前のご両親が生きていたら…何と云うかしらね。」

でも、きっと賛成してくれていると思うわ、

お前のお父様はお家に帰りたいかっただのではないかと思うのよ」

美風は怒って言った。

「違うの！叔母さんや海や、海のお母さんや学校のお友達、

お隣のおじいさんやおばあさんと離れるの、いやなの」

次の日、ハンサムな紳士がまたやって来た。

この人は伯父の使いとして二人を迎えに来た、

大地だいちと言う人である。

彼の父親が、長い間祖父母や伯父の家のかかりつけの医師として働いていた。

父親と同じく医者を目指していた大地は美風に色々な話を話して聞かせた。

美風を引き取る事になるおじいさんやおばあさんがどれだけ金持ちか。

そして美風が大きくなれば、今度はもっとお金持ちの家にお嫁さんに行つて、

大変贅沢で幸せな暮らしが出来ると言うのだ。

しかし、美風はそれほど心を動かされはしなかった。

海の事が気になって仕方ない。海はなんと言うだろうか。

朝の食事を済ませて、美風は海の家へ行った。

海の父親は沖に漁に出ていて、

母親は食事の後片付けをしているところだった。

海は縁側で新聞を読んでいた。美風はいきなり近付いて言った。

「おはよ！」

海は美風を見ると新聞を畳んで笑顔を見せた。

「早いな」

海の隣に座つて、美風はうゝんとうなった。

いつもはにこにこしながら遊びに行こうと言う美風なのに、どうしたんだろうと海は不思議そうな顔をした。

「ねえ海、私がどっか行ったら寂しい？寂しいよね？」

「うん、それはね」

美風は意を決したように言った。

「私ね、お金持ちになれるんだって」

「え！？」

海が叫んだ。

「嘘じゃないの、この前おじいさんやおばあさんのお使いって人が来て、

守都鈴にお金持ちのおじいさんやおばあさんがいるから、

それでおいじさんやおばあさんは私や叔母様に会いたがつてるから、

来て欲しいんだって」

「へえ。おじいさんやおばあさんがいたんだ。

よかつたじゃん、会って来いよ」

海はお金持ちになれると言う事より、そっちの方に驚いた。  
美風は両親がいなくて、親戚も知らないと言っていたから。

「でも海、守都鈴って遠いんでしょ？」

「ああ、海を一つ越えないといけなかったかな」

「私、海と遊べないの、いや」

「少しの間だろ？辛抱しなよ。」

それにさ、本当のおじいさんやおばあさんが

わざわざお前に会いたいつて言ってくれてんだろ、きっと寂しいんだよ。

これでお前が行かなくて、

おじいさんやおばあさんを寂しい思いをさせたら親不幸だよ。

あ、おじいさんやおばあさんだからおじいさん不幸？かな」

「うん…海、ずっと私が戻って来なかったらどう？」

「え？」

「どう？」

「…行くのをやめるのは駄目なのか？」

「あはは、海言ってる事치가ーう」

「いいだろ」

「えへへ、海がそう言ってくれるの嬉しいな！。

でも、絶対行く事になると思うの。

叔母様が、私のお父さんやお母さんも行くのを喜ぶだろうって言うから」

それから、海と美風は真面目に話し合った。

海は色々な事を訪ねてきた。美風は分からないなりに答えていた。

ただしそれは、

大地に教えて貰った事ではなく思いつきで言っただけである。

大地は父親から美風の一族の財産や勢力の事を

詳しく教えられて知っていた。

大地は美風の父親が両親や兄から疎まれていた事も、

政略結婚させられた事も、殺されてしまった事もよく知っていた。

祖父母と兄は今でも美風の父親の事をよく思っていないようだった。

そして、遠くへ引越してしまった叔母の事も。

そのせいか大地も美風の父親やその妹に対して

あまりいい印象を持っていなかった。

大地が叔母と美風の家についていた時、

その家の余りの小ささと貧しそうな様子に脱力した。

しかし出てきた叔母を見て、大地は思わずあっと叫んでしまった。

叔母は何の飾りも無い黒い服を着ていたが、

大地が写真で見た時より美しく若々しくて、まるで娘のようだった。

大地は写真で見た、美風の両親の顔を思い出した。

美風の父も母も美しかったから、その子の美風も可愛い子だろうと思った。

大地はあらたまって優風に自分が何故ここに来たかを話始めた。

優風は真っ青になった。

「何ですって！？私が結婚！？」

声を震わせた。

「何故今更そんな話が？私は美風の母です」

大地が溜息をついた。

「優風様。由緒あるあなたが嫁がれない事をよく思わない人もいるのです」

「美風はどうなります」

「ですから優風様のご両親がおひきとりになると……」

「父や母がそんな事を!？」

「はい、ご両親の意向だけでなく、

優風様の兄上流気様の意向でもあります。

既に屋敷の近くに相應しい家を建て、生活費を差上げると」

「そんな事だろうと思いました。

私が結婚したとして、

あの子を新しい夫の下へ連れて行く事は出来るのでしょうかね。

いつも会う事は出来るのでしょうか」

「それは相手の方の迷惑になるのでご遠慮願いたいとの事です。

ですが、美風お嬢様が貴女を訪ねる事は構わないとの事でございます」

優風はため息をついた。

「私は兄が…あの子の父である流ながれが大好きでした」

と、優風は低い声で言った。

「流兄さんはひどい仕打ちを受けながらも私達家族を愛していました。た。

奥様の事も、美風の事も大層愛していて、

ただ一つ、人とは違う力を与えられた事が悲しいと申しました。

大地さん、美風は力を継いでいるのです」

大地は心の中で驚いた。

「両親とお兄様はご存知ないでしょう。そうお伝え下さいませ」

その時、美風が部屋へ入って来た。

大地は目を見張った。美風は父親似であった。

父親と同じ緑がかった黒い目で、母親と同じ艶やかな茶髪だった。

(何て綺麗な子だ)

大地は口には出さなかったがそう思った。

「君が、美風…？」

と美風を見つめた。

## 第一章「3」 / ……旅立ち

優風が別の用事で出掛けたので、家には大地と美風の二人だけだった。

大地は子どもに慣れておらず、

美風と何を話せばいいのか分からず黙り込んでいた。

美風は大地を見つめて口を開いた。

「お兄さんは、伯父様のところから来たの」

「はい」

と大地は答えた。

「私は伯父様達の事をよく知らないんです。教えて頂けませんか」

「わかりました」

「お祖父様やお祖母様、伯父様はどんな人ですか？」

「大変お金持ちで、偉い人達ですよ」

「あの、よく分からないです。お祖父様はどんな食べ物が好きなの？趣味は？」

「ええと、それは…そうですね…」

大地は説明しにくそうに呟いた。

「お祖母様はどんな花が好きなの？伯父様はどんなスポーツが好きななの？」

「それは、お会いしてからのお楽しみにしましょう」

と、大地は負けずに言った。

「そうですね、お会いしてからの方が知る楽しみって言うの、増えますね」

大地は興味深そうに真面目な顔つきで何かを考え込んでいる美風を見つめた。

「さっきお金持ちの偉い人って言ってましたけど、どうして偉いんですか？」

「どうしてお金持ちになったの？」

「貴女のお祖父様やお祖母様、  
そのまたお祖父様やお祖母様などのご先祖様が、代々王様によく尽くして、

立派な手柄を立てて、その度にたくさんご褒美を頂いたからですよ。

最初の方は今から千年も前の話です」

「千年！」

と美風は目を丸くした。

「私は見た事ないです、千年も前のことなんて」

「それは、私もですよ」

大地は微笑んだ。

「これまでの話、お分かり頂けましたか」

「はい」

「先程も言いましたが、お祖父様やお祖母様、伯父様は大変お金持ちです。

何でも貴女の好きなものを買って下さいますよ」

「わぁ！いいなあ！」

美風は目を輝かせた。

「でも私、私じゃなくて一番に叔母様が欲しい物を私が買ってあげたいんです、

私は子どもでお金持っていないですからね。

それに海や海のお母さんや、お隣りのおじいさんとおばあさんにも」

「海…君、ですか？」

と大地は聞いた。

「海は友達で漁師なんです、

今は子どもだからちゃんとした漁師じゃないですけど、なるって言っていました。

私は海には漁師の才能絶対あると思うの、魚とるのも上手くて、学校の皆と釣りに行った時も一番たくさんとって、

でもいい奴だから自慢したり馬鹿にしたり意地悪なんかしないの、とれなかった子や私に

「俺はこれだけあれば十分だからさ」って余った魚を分けてくれたの。

泳ぐのが上手で、私が海で溺れそうになった時に助けてくれたし、力も強いけど人を叩いたり弱い者イジメなんか絶対しないの。それに……」

美風は熱心に話した。その時、叔母が戻って来た。

「お待たせして申し訳ありません、

お隣りの方が、最近体が不自由なものですから」

それを聞くと美風は心配そうな顔をした。

「おじいさんとおばあさん、大丈夫でした??私、見て来ます!」

美風が部屋から走り出て行くと大地は叔母と向き合った。

叔母は大地を心配そうに見つめた。

「力の事を言っても、私達を連れ戻すと思われませんか」

「はい、何があっても必ずお二人を連れて帰れと、

力の事を例に挙げておっしゃってましたので……」

「そうですか。」

あの冷たい両親や兄も、もしかしたら改心したのかもしれないね。

それに両親にとって美風は孫、兄にとっては姪ですから……

あの子は父親に似て活発で優しい子ですから、

きっと可愛がって下さると思います……」

それに、私が結婚しても変わらず会いに来てくれるでしょう。

会わなくても思っていてくれるでしょう。

私の結婚の事は、いずれこうなる事は分かっていたのですから仕方ありません」

大地は思わず目をそらしてしまった。同時に美風を思っ気持ちに打たれた。

心の冷たい老夫婦と、



我が儘で人一倍気の短い叔母の兄が誰かを可愛がるなど想像もつかなかった。

しかし、美風は女の子で（伯父には息子2人しかない）  
幾らでも有力な相手に縁談を持ち掛ける事が出来るから  
縁談で問題を起こさない為にもよく思われるよう演技はするだろうし、

世間体があるから親戚として最低限の事はするだろう。

守都鈴にたつ前の一週間、

美風は、初めのうちはお金持ちになる事がよくわからなかったが、  
大地と話す内に色々な事が分かって来た。

大地は、美風に村を案内して貰った事、

親しい人を紹介された事を後々まで忘れる事は無かった。  
そして、出発の日が来た。

支度も整い、荷物を船へ運ぶと車が入口に停まった。

出て来た叔母に美風は走り寄った。二人の目は潤んでいた。

「家を離れるの、寂しいわ、叔母様」

「ええ、私もなの」

叔母は静かな声で答えた。

客がほぼ全員船に乗り込んだ。もうすぐ出航の時間である。

美風はぼんやりと手摺りに寄り掛かって景色を眺めていた。  
すると、海がこちらへ駆けて来るのが見えた。

「これ、やるよ」

と小さい綺麗なお守り袋を美風に渡すと、

美風がお礼を言おうとするのも待たないでまた駆け出した。

「袋の中のもんは俺が海で見つけたんだ！じゃな！」

間もなく大きな船は動き出した。

美風は海から貰ったお守り袋を大事に持っていた。

中を少し見ると、綺麗な貝殻や真珠、珊瑚が入っていた。

人がたくさんいたが、海の目には、美風の笑顔しか見えなかった。

「海！また遊ぼうね！絶対よ！」

と言っ叫び声しか聞こえなかった。

## 第一章〔4〕 / …海の上で

船の中で、優風は美風に守都鈴に着いてしばらくしたら結婚をするから、

自由に会えなくなる事を伝えた。

多少話しを聞いていた美風だったが辛そうだった。

「美風、悲しまないでね。」

私は貴女が好きだし、貴女が会いたいと思えばすぐ会えますからね」

「私も叔母様大好き…」

美風は悲しそうにじつと海を眺めていた。

ある時、美風は真面目な顔つきで大地に言った。

「叔母様と自由に会えなくなるの嫌なの、

でも叔母様はいつも寂しそうでしたから、

いい人と結婚して寂しくなくなるのはいい事ですよね。」

私は寂しいけど、叔母様の為に身を引くんです」

とませた口のききかたをした。

大地は美風が顔だけでなく可愛いと段々思うようになった。

船室にこもっていた人達が甲板に出て来るようになった。

そのうちに遠い北の国から来ていると言う珍しい一行の事が、

皆の間で評判になった。

美風は優風や大地と話している時以外はその一行を興味深そうに見ていた。

一行は8人で男女半々。

銀糸で刺繍された白や黒の被り物を被り、口元から下は黒布で覆い、

顔を少し隠くすようにしている。

どの男女も透き通るような白い肌をしていた。

彼等は容姿や服装が美風達と変わっていたものの素朴で温かい人々

だった。

美風は彼等と友達になった。

彼等は子どもが好きで、

その一行の中の女の人達が美風を話しの仲間に引き入れてくれたきつかけだ。

たまに男の人もやって来て海賊や祖国などの不思議な話を聞かせてくれた。

優風や他の客も彼等に強い関心を示していた。

彼等が流暢にこの国の言葉を話す事ができると知って、積極的に話している人もいた。

そうしているうちに美風は聞き慣れない彼等の国の言葉を幾つか覚ええた。

ある時、美風は甲板にある椅子に座ってうたた寝していた。

目を覚ますと、近くにあの一行の女の人が二人いて、近付いて来た。

一人は美風に最初に話しかけてきた中年の婦人ドウラで、もう一人は綺麗で親切そうな若い娘だった。

「美風、よくまあこんな騒がしいところで眠れるもんだ」

と、ドウラが言った。美風はにこつと笑った。

「だって、眠かったんだもの」

「そうよねえ、ま、子どもはそうでなきゃ。

そうそう、この子はアクファと言って、

私達と違って初めて他の国へ行くから緊張しすぎて、

中々あんたの国の人と話せないんだよ、

あんた暇なら、ちょっと話し相手になってあげておくれ」

美風は嬉しそうに手を差し出した。

「アクファさん、私、美風って言います、よろしく」

「美風：ちゃん、アクファで構わないわ」

とアクファが美風の隣に座り、微笑みながら言った。

「アクファ達は色々な所に行けていいですね。」

でも大変ですね、ドウラさんから聞きましたけど、ドウラさんやアクファの国の神様が、大事な何かを見つけるように命令したんでしょ？

それが何かはアクファの国の人以外に言ったらいけないですよ、

早く見つかるといいね」

美風は無邪気な声で言った。

「ありがとう。でもね、それが見つかるのはそう遠くない気がするのよ」

「どうして？」

「ええと…」

ドウラの視線を受けてアクファは言い淀んだ。

「あれ、アクファ、指を切ったの？」

アクファの人差し指に、かすかに細い赤い傷が伸びていた。

「本を読んでいる時に切ったの」

「治してあげる！」

美風がほんの一瞬、アクファの傷ついた指先を両手で隠して、離れた。

「ね、もう痛く無いでしょ？」

ドウラとアクファは驚いたように顔を見合わせた。傷が消えている。

「え…ええ、ありがとう」

アクファが優しい声で言った。

「美風や、今の、どうやったんだい？」

美風は慌てて手を振った。

「突然出来るようになったの。」

でもいつも出来るわけじゃなくて、失敗ばかりなんだけど…」

ドウラが優しく美風を引き寄せて言った。

「美風、よくお聞き。」

お前には私達が持ち得ない素晴らしい力が備わってるようだね。

だけど、自分にその力が無いからって、お前をさらって操ろうとする悪い奴が世の中には五万といるんだよ」

「えっ五万も！」

と、美風はびつくりした声で叫んだ。

「そうさ。だから、用心しなくちゃいけないよ。

そう言う奴がどこにいるか分からないんだからね。

だから力がある事を普段は隠しておいて、

いざと言う時の為にとっておくんだよ。いいね？」

美風は大真面目な表情で頷いた。

今まで用心と言うものをそれほどした事が無い美風だったが、この忠告を受け、ちゃんと守ろうとしたのは全くの幸運だった。

と、言うのは、美風自身がその力の素晴らしさ、

恐ろしさを全く分かっていなかったからである。

二週間目に、船は守都鈴の港に着いた。

そして二日目の朝に、

これから美風の家になる緑蓮りょくれんに着いた。

明るくて家の様子がよく見えた。  
かがみ

鏡南は美風のお手伝いのばあやとしてこの家に来ていた。

鏡南は二人に歩み寄ると嬉しそうに涙を浮かべた。

「優風お嬢様、お会いしとうございました…」

あらまあ貴女が美風お嬢様ですか、何て可愛らしい…お父様にそっくりで…」

優風はほっとした表情を浮かべた。

鏡南は優風が小さい頃から家にいて女中としてまめめめしく働いていた。

鏡南は優風と流が大好きだった。

常々心の中で何とか二人の力になりたいと思っていた。

「ああ、ばあや。私もお前に会えて嬉しいわ。どうか、美風を頼みますよ」

鏡南は劣るように優風の手を握ってしつかりと頷くのだった。

長い間遠くにいて、我が子に等しい美風を他人に近い親と兄に預け、

更に自分は結婚させられるのである。

お可哀相なお嬢様：と、優風に同情していた。

他の召使は珍しそうに二人を見ていた。

召使達は一家について色々な噂を聞いていた。

美風はいつの間にか家の中に入って辺りを見回した。

広い部屋にはおもちゃや本がたくさんある。

「叔母様、この家すごい！！これからこの大きな家が私の  
お家なんですね！！」

以前住んでいた家に比べると、格段に広い立派な家だった。

美風は嬉しくなった。

大きなベッドに寝転ぶとたちまち旅の疲れが出て眠ってしまった。

優風は眠っている美風をそっと見た。

そこへ二人が着いた事を、

美風の祖父や伯父へ報告しに行っていた大地が戻って来た。

「今夜、旦那様方からお二人へお話があるそうです」  
と、改まって告げた。

## 第二章（1） / 従兄弟たち

日が落ち、やって来た召使が三人を客室へ案内した。美風は元気よく

「失礼しまあす！」

と部屋に入った。

部屋はとても広く、

大きい長方形の机や贅を懲らした置物などが幾つも並んでいた。

一番奥の椅子に厳めしい顔をした誰かが腰掛けていた。

「優風と美風以外、下がれ」

疲れの滲んだ、ひどくしわがれた声がした。

優風の父であり、美風の祖父である姜明せんめいの声だ。

髪も眉も銀色で、体はがっちりしていたが背は高くないように見えた。

美風は楽しそうに走り寄って行った。

優風は不安そうに見守りながら両手を固く握りしめる。

姜明は睨み付けるように孫を見てすぐ、ひどく驚いた。

用意された服を着て、

照れ臭そうな笑顔で見上げる彼女には息子の面影が確かにあったからだ。

「もつと、顔を寄せてくれ」

姜明は思わず美風の肩を抱いた。

「優風」

「はい、お父様」

姜明は美風の頭越しに優風を眺めた。家を長く離れていた娘。

「すぐに優やかえヶ恵を連れて来るのだ」

間もなく、

優風に車椅子を押してもらいながら上品なおばあさんが美風に近づいて来た。



優風は車椅子をいつでも動かせるようにしたまま

「美風、こちらが優ヶ恵おばあ様よ」

と紹介した。美風は嬉しそうにお辞儀をした。

「おばあ様、会えてとっても嬉しいです」

「ええ」

ほとんど表情の変わらない、青白い優ヶ恵の顔を見て、

美風と優風は目を見合わせてしまった。

「お母様、身体の具合が？」

「姜明様。この子が、流の？」

優風の言葉を無視して、姜明に話しかける。

「そうだ」

「姜明様」

と優ヶ恵は夫にそつと言った。

「とりあえず。容姿は、申し分ありませんわね」

「わしも、そう思う」

と、姜明は影のある笑みを浮かべた。

「ようし？」

美風は首を傾げ、不思議そうに優風を見上げた。

「容姿も分らないの？」

「はい、わかりません」

美風は素直に答えた。

「まあ、何て子なの。どんな教育をしていたのです、優風」

優ヶ恵は、大袈裟に優風に文句を言い出した。

「お母様、そのような小さい事に目くじらを立ててはいけませんわ。」

ご病気のお母様には、お父様にも、この子の素直で優しい所は、  
どんなにか救いになると思いますわ」

優風は美風の頭を撫でながら、静かに言った。

「私はもちろん教えますが、お父様やお母様も上手に教えて頂ければ、

覚えはいい子なのです」

その時、

「失礼致します」

入って来た叔父の妻は、優風と美風に目を留め、入口の所に立ち止まった。

「あらあら気京さん、あなた達も、よく来てくれたわね。流気からは仕事が終わったら来ると連絡が入ったわ。

さ、こちらへおいでなさい」

気京の後から、息子二人が車椅子の側へやって来た。

「こんばんは、おじい様、おばあ様。お招きありがとうございます」

兄が、冗談っぽく敬礼する。

「ご機嫌よう、おじい様、おばあ様」

弟が、丁寧にお辞儀をする。

兄の勇潤は、優風と美風に目を向けた。

母気京が優風に挨拶したのをきっかけに、自分も挨拶し、弟誠河も躊躇いがちに、それにならう。

12になる、鋭い目付きをした兄の勇潤は、

すぐに大人達の間流れる微妙な雰囲気を感じた。

眼鏡をかけた、大人しそうな2歳下の弟、

誠河も何か違う事に気付いたようだ。

二人は申し合わせたかのように美風の前に立つ。

「君が美風か」

「そう」

「俺は勇潤。こっちは弟の誠河」

「美風は、幾つ？」

横から、誠河が優しい声で聞いた。

「七つよ」

「母さん、夕飯まで、三人で遊んでいいでしょう？」

勇潤の言葉に、大人達が、ほっとしたような表情を浮かべた。

勇潤は美風の手を引っ張り、弟の背中を軽く押す。

「お祖父様とお祖母様のお屋敷を、案内する。来たばかりでろくに見て無いだろ？」

「うん」

「じゃあ、舞踏会の間とかさ」と、誠河。

「それもだが、お前達、お腹空いて無いか？」

美風はごくりと唾を飲み込んだ。

「ちよつと前から…」

「なら一番は厨房で決まりだな。」

美風は、真賀太<sup>まがた</sup>って奴、知ってるか？」

「ううん」

「真賀太はコックだよ。でも兄さん、今沢山つまみ食いすると夕食に響くよ」

「分かってる。少し、少しな」

誠河は美風に耳打ちした。

「兄さんの少しはあてにならないんだ。」

僕もだよ。真賀太の料理、特にお菓子はすごく美味しいんだ」

美風は、兄弟と一緒に厨房へ向かう。

「来られると思ってましたよ、ぼっちゃんがた」

扉を開けて、コックの帽子を被り、

深い皺の刻まれた顔を覗かせた真賀太がにこにこしながら言った。

「旦那様や母君から、きつく言われてますから、これで勘弁を」

軽いおつまみ程度の、小さい、

可愛いお菓子を三つ乗せた皿を手になっていた。

「あんたが美風お嬢さんかね、僕は真賀太と申します。お見知りおき下さい」

三人が美味しいお菓子をあつと言う間に平らげ、夕食の準備で忙しい厨房から出た時、美風の耳は、真賀太に話しかける、

低い誰かの声を聞いた。

「あんな人に引き取られて、可哀相に」

驚いて厨房の方を向いた時、

誰かの方を向いて扉を閉める真賀太と、一瞬目が合ったように思った途端、

今度は誠河が手を引つ張る。

「次は、舞踏会の間だよ」

「わぁ…きれいな所…」

美風は、誠河の方へ目を輝かせて向く。

「ここで、舞踏会があるの？」

「そうだよ」

誠河は、ちらりと兄の方へ目をやった。

「16歳になったら、お前も参加出来るさ」

微笑みながら、勇潤は美風の頭を撫でてやろうと手を伸ばしかけた。

その途端、開かれた扉から出て来た人物に、彼の目は吸い寄せられた。

「勇潤、誠河。待たせたな」

父親の流気だ。勇潤と誠河はやや緊張した面持ちで挨拶をする。

「父様」

誠河は背筋を伸ばした。

「お父様、お帰りなさいませ」

勇潤は言いながら、父親に手近な椅子を勧める。

美風は食い入るように、椅子に腰を下ろした叔父を見つめた。

背はそれほど高くなく、痩せていて、

悪くはないが無愛想な顔をしていた。叔父は

「歳は幾つだね？名前を聞かせてくれ？」

「美風です」

後から入って来た祖父母や叔母にびくつとした美風は、かすかに声を震わせた。あまり、いい笑顔になれなかった。

「七つになりました」

「ほう。中々すっかりしているな、よろしい。

我々が、君を引き取って、育ててあげるのだから、

我が一族として恥ずかしくない振る舞い、

言葉遣いを身につけて貰うのは当然として…役に立って貰わねばいけない。

そして、一番大切なのは、迷惑をかけないようにしてもらいたい。両方を満たすのは容易ではないが、満たす為の一番の近道として、お母様の世話係りになってもらおうと思う。

大切なことは、普段は私達にやたらと話し掛けないようにすること。

私達もそうするよう気をつける」

「はい、叔父様…」

美風を見た優風は、

心に冷たい氷のかけらをたたき付けられたようになった。

馴染めさせないための一線を引かれた事を、感じ取った顔の寂しさ。

優風は、少しでも寂しさを取り除きたかった。

「美風。父様は言葉が足りなくて。

大人にだけ話し掛けるのを気をつければいいって事だよ、俺と誠河は子どもだから、いつでも話し掛けていいから。

また遊びに来るし、君も遊びに来ればいい」

「勇潤兄さんっ誠河兄さんも、また宜しく願います」

優風は、美風に頼れそうな子が出来そうなのに安心したが、所詮は子ども、

まだ自分の目が届かない所に置くのはいけないと感じた。結婚の話しさえなければ…。

ある時、父親は優風に言った。

「あと三ヶ月程で、天秀君と式を挙げ<sup>てんしゅう</sup>るのだからな？」

天秀。名前を聞き、優風は複雑な気持ちになった。

元々幼なじみだった。家柄はいいが、自分よりも身体が弱く、病室で、よく泣いている所を慰めた。

「…分かっています。」

それよりお父様、美風にお母様のお世話をさせるのなら、私も一緒に手伝いますわ」

父親はほんの少し考えて、頷いた。

「まあ、いいだろう。そんな余裕があるならな」

## 第二章「2」 / ゆがんだお祖母様

休日、美風は目を覚ますと、暗い気分になっている事に気付いた。学校がある日は、まだいいのだけど。

窓から差し込む明るい光に少し気分を和らげたが、

「変な気分、あんなに会いたかった叔母様にも、

誰とも会いたく無いなんて」

そして、寝不足で充血した目をこすりながら、

おじい様と、特におばあ様と関わった事を思い出した。

「見てご覧なさいな、この手。

あなたもこの病気になったら、こうなるのよ」

祖母の細い手足は病気のせいで固く、しなびて殆ど動かない。

更に痛みが伴い、祖母はよく大袈裟に顔をしかめ、痛い痛いと言いだ。

「ああ痛い、痛い」

「おばあ様、痛いでしょうね…」

キツと祖母の目付きが鋭くなるのを見て、

美風は祖母を怒らせたと感じる。

「あなたなんかにこの痛みが分かるわけないでしょう、

あなたはこの病気ではないのですから。本当、イヤミな子」

祖母の声はいつも冷たい。そして、口癖のようにこう言った。

「私はね、優風はともかく、

あなたを呼び戻す必要は無いと言っていたのですよ。

私にとっては、

ときばきと要領よく仕事をこなす人間だけが重要なのです。

お前のように、のろまな役立たずは嫌いなのです」

胸が痛み、体が震えるのを感じて、美風は泣きそうになる。

一体自分は何なのだろう。

祖母に言われる事をただこなし、

何かにつけ胸を貫くような言葉を受け続ける日々。

祖母から部屋に帰る許可が出た時には、ほぼ深夜を過ぎていた。昨日、祖父母に、話しがあると呼ばれた。

「あの子、いつつもぐずなんですわ」

俯いて、肩を震わせる美風に、祖母は尚も祖父に言い添える。

「今日のこの服。あの子が選んだのですけど、

寒くて、風邪を引いてしまいそうですね。

こんな事に気付かないなんて…まったく、ひどい子」

そもそも祖母は、服など何でもいいわ、と言った。

（これなんかいかがです？）

美風は沢山ある洋服の中から、

自分が綺麗だと思ったワンピースを差し出した。

（これは駄目です、ぴったりしていてきついのです）

（…でしたら、こちらは？）

今度は違う服を差し出す。

（それは柄が合わないわ）

美風は、抱えられるだけの服を、祖母のいるベッドに運んだ。

（お祖母様、私ではよく選べないので、お持ちしましたからどうぞ）

祖母はわざとらしく頭を抱えた。

（美風。一つ一つ持って来て、あれはどうですか？これはどうですか？

って聞く方が効率いいのですよ）

美風は納得出来ず、首を傾げた。

（そうなん…ですか？）

四苦八苦の末、問題の服を差し出した。

（…まあ、いいでしょう）

「それで、他には？」

祖父は真面目な顔で聞いた。

「顔を拭く際、私の目に、わざと爪をいれましたの」



「それは、大変だったな。一地に診て貰ったのか？」

一地とは、美風を迎えに来た大地の父親である。

「もちろん、診て頂きましたわ。」

幸い、何も異常はありませんでしたから、

私は、美風を許してあげましたの」

美風は、違う！と心の中で呟いて、小さく首を横に振った。

（痛っ何でそんなに力を込めるの）

蒸したタオルで、そっと祖母の顔に触れた瞬間言われた。

（あ、今目に爪が当たったわ。痛いわ、目が開かないじゃないの）

タオルしか当てて無い筈が、目が痛い、開かないと、

大騒ぎする祖母の声を聞き付けた召し使いが、一地医師を呼んだのだ。

（お前では失敗するから駄目ね。他の者を呼んで）

（大奥様、何も異常はございません。何も。ですから、大丈夫ですよ）

（そう、よかったわ…なら、下手でも仕方ないわ。

美風で我慢してあげましょう）

「寛大だな。結構。他には？」

「ええ、他にも、この子に長い間放っておかれた事もありましたの。

恐かったですわ…」

美風は目を閉じる。

トイレに行っていて、祖母から呼び出しのベルが鳴った時に、すぐに行けなかった。

（お祖母様、遅れてごめんなさい！）

祖母は、一人で立てない筈なのに、立ち上がるうとしていた。

（お祖母様、座って下さ…）

（いいから、それを捨ててちょうだい）

美風の目の前に、手近なゴミを幾つか投げる。

（これなら、どんなに頭の悪い子でも出来ますからね。

終わったらもう下がっていいわ、他の人を待つから)

(お祖母様、他の人がいつ来るか分かりませんよ?)

その日は、叔母の婚約者のもてなしの準備だとかで人が出払っていて、

普段はすぐ飛んでくる召し使いも来れない状態にあった。

(何時間でも待つてるからいいわ。

あなたと喋っていると疲れるから下がって)

そう強く言われたから、部屋へ戻った。なのに。

「そんな事が…。優ヶ恵、お前の手にも負えないとは、大変だったな」

祖父は溜息をついて、不愉快そうに美風を見る。

「田舎で育ったお前には、変わった所があるから、頭がおかしいかもしれないと訝しんでいたけれど、やはりおかしいようだ」

呟いて、美風を冷たく見やった。

何か、対策を考えなければならぬかもしれない。

「美風、下がっていい」

美風が自分の部屋へ下がった後、

優ヶ恵の部屋から、優ヶ恵と鏡南の話し声がした。

「ふふっあの子、今日もやっど、

意地悪なお祖母さんから解放されたと思ってるでしょうね」

優ヶ恵は、冷たい笑みを浮かべながら言った。

「何の事ですか？大奥様」

鏡南は、不審そうに聞いた。

「いじめてやってるのよ」

「はい？」

「毎晩0時を過ぎるまで、話し相手になってもらうの」

「まあ…何の話しをしてらっしゃるんです？」

「話し…ではないわねえ、

何かにつけて用事を言い付けて、引き止めてやるのよ」

鏡南は、他の召使から聞いた話を思い出した。

優ヶ恵は美風の事を、他の召使にどう話していたか。

（眠っていて、誰かがいると思っただら、あの子がいるでしょう？  
もうびっくりしてしまっただわ）

（あの子が何かにつけて話し掛けて来るから眠くて敵わないの。  
気がきかなくて…本当に、困った子）

「まあ…」

鏡南は、動揺を表に出さないよう努めた。

「何ですって？深夜まで？」

「はい、お嬢様」

と、鏡南は冷静に、自らが聞いた話を洗いざらい言った。

「小さい美風お嬢様のお体に、支障が出ないかと、  
差し出がましいようですが、ご報告させて頂きます」

「ああ…鏡南…」

優風は険しい顔をした。

「つまり、休日は朝から晩まで。学校がある日は、  
帰って来てから晩まで母の世話をしていると言う事ですね」

「その通りです。」

何度か目を赤くされている姿をお見かけ致しましたので、  
それとなくお話を伺おうとしましたが、

美風お嬢様からは、大奥様や旦那様の悪いお話しは全く聞きません」

優風は、すぐに返事が出来なかった。

自分は、結婚までに済ませなければならぬ事が山積みで、  
中々屋敷に帰れず、兄の屋敷に泊まる事もしばしば。

帰っても美風とは軽く挨拶をする程度で、ゆっくりと話す暇が無か  
った。

だが、何とかしなければなるまい。まずは美風…。

「いつも、こんな時間まで、お母様のお世話を？」

美風が部屋に戻ると、叔母がいて、優しい声をかけてくれる。

心配そうな目で美風を見つめる。

「はい…叔母さま」

「おじい様とおばあ様は、あなたに優しくしてくれていますか？」  
「はい」

正直なところ、美風は祖父母が優しいと感じた事は無かった。

だが、叔母を心配させるのは心が痛む。

ただし、叱られた事を黙っていたら、それが叔母の耳に入ったら、嘘をついたと思われるかもしれない。美風は慌てて言い添えた。

「あの…あの、私、おじい様とおばあ様の氣に入らない事をして、怒られる時もありますよ」

優風は、一瞬笑みを崩しそうになったが、すぐ元の笑顔で、何気ない風に聞く。

「そう…例えば、どんな風に？」

「氣がきかない…や、役立たずで、嫌いって」

思い出して胸が痛くて、泣きたい気分になった。

「まさか、おじい様達が本気でそう思っていると思っているの？  
それは違うと思うわ」

温かい手が、頭に置かれた。

「本当じゃないの…？」

優風は、胸に苦いものが上がるのを感じながら、  
そうですよ、とわざと柔らかい笑みで、安心させるように、  
美風の頭を撫でた。

「美風。今は、心が温まらない時期ですね…」

「叔母さま…？」

「ただ、それは、自分をよりよい人間に鍛える、  
いい試練の時期でもあるのよ。」

冷え切った恐ろしい心にならない為には、ありのまま受け入れて、  
何でもいいから、自分に自信をお持ちなさい。

あなたと同じ歳で…いいえ、それ以上でも、  
あなたほど辛抱強くて真面目な子、見た事無いわ」

美風は、さっきまでの、すっきりしない暗い表情とは一変し、ふっきれた強い表情を見せて頷いて、叔母に抱きついた。

「誰が何と言おうと、あなたはとっても可愛くて、優しい、素敵な女の子なのよ。忘れないでちょうだい」

## 第二章「3」 / 悲しみを癒すお守り

美風が学校へ行く事に対しては、美風はひどくおかしな子だから、と祖父母はずっといい顔をしていなかった。しかし行かせないわけにはいかない。

祖父母の余計な心配をよそに、美風はいい友人に恵まれ、学校に行くときは素晴らしく元気よく、帰って来る時は心なしか沈んだ表情で帰って来た。

「鏡南、私、学校がとても楽しみよ」

美風は毎日のように学校であつた事を報告した。

「屋敷に戻るのが嫌なぐらい。もっと学校の時間がのびればいいのに」

「それはようございましたね。上手く馴染めるか心配しておりますたよ。」

理奈穂様や、重柳様はお元気でございますか？」

理奈穂は、学校に入つたばかりの頃、美風の隣の席になった女の子で、

黒い髪を二つに結び、明るく輝く茶色い目、白い肌。

男女構わず冗談を言い、笑わせるのが好きな子で、美風と一番一緒にいる子である。

「俺、家ではしっかりしてるんだよ、家事は何とかやるし」

「偉いじゃん」

「食事も一人で作って父さんや母さんにあげるんだぜ」

「ああーお嫁さんにしたいタイプねー」

理奈穂によく絡む彦志と言う男の子と、このようなやり取りをしている。

重柳は首をすつきり出した爽やかなショートカットの男の子で、奥二重。

美風と同じ年にしては背が高く、クラスの委員長で鋭い存在感があ

った。

転校してきた美風に最初に話しかけて来た男の子だ。

気雪きゆきと言う、

意地悪な女の子が自分の気に入らない子の悪口を美風に吹き込もうとした際、

「人の悪口を言う人間は最低だよ」

と注意した。気雪は頬を膨らませ

「何よ。私はね、私だけの美人の友達欲しかったんだから」

「それは何故？」

「他の人に美人の友達がいますって言ったら、

その辺の普通の顔の人を言うより驚かれるし、自慢出来るじゃないの」

と重柳に反論し、彼はもちろん、美風を呆れさせた。

「ええ。唯吹ゆいぶきさんや沙々波ささなみさんも、みんな家に遊びに来たいって」

唯吹と沙々波は仲良しな幼なじみで、唯吹はさばさばしていてスポーツ万能、

茶色に近い黒髪と目。沙々波は濃い黒髪としっとりした黒目。

気の強い唯吹とは反対に穏やかで物静かな、そして気を遣う男の子だった。

唯吹が家で嫌な事があって考えていた時、

「何を考え込んでいる？お前らしくないぞ」

「え？ちよつと黙ってただけよ。もう、私、普段どんなに煩いのよ？」

「和むんだからいいじゃないか」

「沙々波はね、人の事心配しすぎなの」

と唯吹は美風に話す。

「そりゃ心配するさ」

と、沙々波。

「唯吹さん、いいじゃない。それだけ唯吹さんの事、気にかけてくれてるんだわ」

と、美風が沙々波のフロアをした事があった。

「私もあの人達の家に遊びに行きたいな。誘ってくれるのを、断るのはいや。」

でも、おじい様やおばあ様がいい顔しないからしかたないわ」

美風は寂しそうに微笑んだ。

何故なら、他の子どもの家へ行くな、呼ぶなと言われていたからだ。

「そう言えば美風様、あなたにお伝えしたい事があります」

鏡南は美風にそつと言った。

「天秀様が、今度の日曜日、あなたに挨拶をしたいそうです」

美風が天秀と会ったその晩、美風は鏡南に話を聞かせた。

「天秀さんは顔色が悪かったわ、背はとっても高いけど痩せていたし。」

体が弱いのは本当なのね。いい人だったのよ。私、安心しちゃった。叔母様がひどい人と結婚させられるかもしれないって思ってたから。

『君が美風さんか。優風さんからよく話を聞いているよ。』

どっちが優風さんの好きな物をよく知ってるか勝負しないか？』

って聞かれたの。だから、

『はい、勝負しましょう。負けませんから』

って答えたのよ。でも私負けしてしまったの。まさか叔母様を小さい頃から知っていたなんて。

『君が時々顔を見せに来てくれたら嬉しい。優風さんも喜ぶ』

って言うてくれたわ」

天秀と美風の二人が出会ったその月の最後の日に、天秀と優風は式を挙げた。

式が終わり、美風が一人になった時、ぼんやりと海から貰った袋を見つめていると、

勇潤がそれを見つけて言った。

「お前、いつもそれを手放さないんだな」

「だって、大好きなんだもの。海の手作りよ」

と、美風は嬉しそうに言った。また、二人の様子を見て側に来た誠



河も口を挟んだ。

「海？」

「私がここに来る前、よく一緒に遊んだの。元気かな、どうしてるかな。」

勇潤兄様に感じがちよつと似てるかな。とっても頼りになって、優しくったの」

「…そうか」

「兄様、おじい様がいいとおっしゃってくれたら、私がいた村に連れて行つて？海に会いたいの」

「許可が出たら、お安い御用だよ」

と、勇潤が答える。

「本当？」

「ああ。それに俺も、その人にお会いしたい」  
だが、許可が下りる事は無かった。

美風が祖父母の屋敷へ来てから、六年が経過した頃、美風の身の上に、更に思いがけない事が降って来た。祖母が死に、叔母が出産後に倒れたのである。

体が弱いのに加え、出産と精神的なものが原因だった。

「叔母様、死んじゃ嫌…」

弱々しい美風の声が聞こえた。

「君を置いて死ぬわけないよ！」

「おい美風、呼び掛ける」

「はい！」

優風はぼんやりと、美風と従兄弟達のやりとりを聞いていた。引いては寄せる波のある痛みに、歪めた顔を美風に見せなくなかったが、どうにもならない。

「叔母様が死んだら由子真ちゃんはどうなるの。まだ小さいのよ」  
その時、誰かが入って来る気配がした。

「天秀さんっ何とか出来ないの！？あなたのせいじゃないの、叔母様がこんなになるまで気付かないなんて！」

優風は、何とか目を開けると血相を変えて叫ぶ美風を見た。

「彼を責めないで。ね、美風。それは間違いよ」

「あ、私……」

美風はうなだれた。

「ごめんなさい」

「いいんだよ。それよりも、君に頼みがある。僕には出来ないが、君なら出来る。」

「わかるね？」

美風は天秀の言わんとしている事を悟り、天秀の目を見つめた。

「天秀：さん？私の顔を見て？どう言うこと？」

優風ははつとしてから首を振る。

「美風：私はいいの。お願い……やめて」

美風は痩せ細った叔母に目を戻す。

かつて一度だけ、傷を消した。

自らの力だったと確信するにはあまりにも曖昧で遠い、幻のような記憶しか残っていない。

だが。

「でもやらなきゃ。やってみなきゃ叔母様が」

叔母の容態はかなり危ないと天秀から聞いた。

（叔母様が死ぬかもしれないなんて……）

叔母は、母のいない美風にとって母親そのものなのだ。

（子どもが親を助けるのは、当たり前なもの）

「天秀さん、あなた」

「頼む、早く！」

何かを言いかけた優風を制し、天秀が悲痛な声を上げる。

美風は意を決すると、叔母の額に手を当てる。

何か固い物で殴られたような衝撃に、美風の頭がくらくらし、目の前に星がちらつく。

胸に、下腹部に、ひどい痛みを感じた。

「あ、あ」

見ると、自らの胸や下腹部が空洞になっている幻覚が見えた。

天秀の震えた声が聞こえて来た。

「な、何だ、どうしたんだい？」

「胸に……」

美風は下腹部よりも強烈に痛む胸を押さえると、顔を歪めて吐血した。

「うわ！」

「美風！？！」

天秀、勇潤、誠河。そして使用人たち。

その場にいた全員が、驚きと不思議な力への恐怖を漏らすまいと行動を起こすのを躊躇う中、

優風は救われた、と天秀だけが笑顔だった。

だがこの笑顔の後、叔母は意識不明の重体に……。

## 第二章「4」 / ……願ひ空しく

「天秀くん。これはどう言う事かね？説明してもらおう」

知らせを受けて部屋へやって来た美明は、勇潤と誠河、召使を部屋の外へ出した後、

眉一つ動かす事無くこう言った。

「わ…私ではなく、彼女の意志です」

こう言つて天秀は状況を説明し始めた。

（危なかった、何故思惑が…）

美明が、自分の説明を疑う様子がないので、胸を撫で下ろす。

「まったく厄介な…」

美明は、咳込み、肩で息をしている美風を怒鳴りつけた。

「美風！何故力を使った！！」

美風は拳を床に叩きつけた。わけの分からない激しい怒りが湧いたのだ。

「叔母様を、助けたかったです！」

叫んだ直後、美風はうつと呻き、胸を引っ掻くようにして倒れた。

「お義父様、すぐ医者を呼びますから！」

美明はフンツと鼻を鳴らし、

「必要ない」

と、携帯電話を取り出した。

「一地、来い！」

「はい、旦那様」

一地は大地が運転していた車から降り、天秀の屋敷の門を潜ろうとしたところで、

大地の方を振り返った。

「大地。お前もだ、ついて来い」

車を下りる大地が、呼ばれたのはあなただ、と責めるような視線を向けて来たが、

一地は無視した。幾ら主人に嫌悪感を持っていたても、自分達は我慢して仕えるしかないのだ。

一地は優風と美風の容態を素早く診て、別室へ大地に美風を運ばせた。

「優風は」

羨明の言葉に、一地は黙って首を横に振る。

「ドクター、どう言う事ですか！そんな…そんなはずが…」

天秀が蒼白になる。羨明は不愉快そうに、自分の足元に落ちた大小の美風の血に目を向ける。

「旦那様、お帰りですか？」

一地は部屋の外へ出ようとした羨明に問い掛けた。

「ああ」

「美風お嬢様は」

「好きにしろ」

羨明は部屋を出る。召使が数人いて、勇潤、誠河が駆け寄って来た。

「部屋の床が汚れているぞ」

召使が慌てて血を拭いにかかった。

「お祖父様、叔母様と美風は」

と、勇潤が聞く。

「一地が診てくれているから大丈夫だ。さあ勇潤、誠河。お前達は私が送ろう」

本当に、この子には不思議な力が内在したのだ、と一地は思った。この子の父親と同じく。

「父さんには、この状況が分かるのか」

「旦那様は『力を使った』と言っていたからな。

推測だが、もし優風様の痛みを引き受けたなら、この痛みは痛み止めが無いと、

大の男が泣き叫ぶぐらいなんだ」

一地は美風を複雑な目で見て、痛み止めを注射する。

「気絶したのも無理は無いな」

「辛かったどころではないはずだ」

と、大地は吐き捨てる。いや、と一地は口を挟む。

「お嬢様が、本当に辛いのはこれからだ」

父の言葉を受け、大地は目を見開く。

「まさか、優風様は」

「ああ…逝ってしまわれたよ」

大地はそんな、と言いかけて黙る。

（美風お嬢さんにとっては、誰より大切な人が）

大地は胸が激しく痛むのを感じた。

（あの、優しい人が）

「何故？力を使つたなら…助けられるはずでは」

大地の動揺を気にする様子もなく、一地は洪面を作る。

「そこが、妙なんだ。流様とは違う…」

大地は美風に目をやる。

痛み止めが効いたのか、美風は穏やかに眠っているようだった。

後日、優風の葬儀が終わった。美風は羨明邸に戻され、

勇潤と誠河は眠っている美風の様子を何度か見に来た。まだ目を覚

まさない。

「おじい様、入りますよ」

勇潤の声がして、安楽椅子を動かして振り返ると、勇潤と誠河が立っていた。

「おお、どうした」

「美風は、まだ眠っていました」

「そうか」

勇潤は苛立ったように腕を組む。

「今更ですが…あの時…何故もつと早く一地を呼んで、診せてやらなかったのです」

誠河が一步前に入る。

「そうです、あんなに長く苦しませる必要が、どこにあったのですか」

二人は、祖父が一地を呼ぶまでの会話を聞いていた。

「あなたが最初から助けていれば、こんな事に…」  
と、勇潤は小さく呟いた。

「二人とも、一体どうしたと言うんだね？美風は無事じゃないか、一地に任しているから心配無いさ」

二人は釈然としない気分で、祖父を見つめるのだった。

大地が一地の代わりに美風の様子を見守っていると、美風が目を開け、大地を見た。

大地は微笑んで、少し顔を近づけた。

「大地さん」

「気分はいかがです？」

「どこも痛く無いわ、よく寝たお陰みたい」

「昨日、中学のクラスメートの陽紀<sup>よっき</sup>さんと重柳さんが、心配のお電話を下さっておりましたよ」

「え？」

美風が目を見開いた。

「心配？何故ですか？」

大地は、話しをしていると、美風が、まだ事情をよく飲み込めていない事と、

少し気分が思わしくない事に気付いた。

しかし美風の回復の兆しは順調に見えて来たと感じた。

「とりあえず…お電話があったと言う事は、お忘れ無く」

「はい」

「私は父を呼んで来ます」

美風は、部屋から大地が出ていくと目を閉じ、何かを堪える顔をする。

「叔母様は…あの痛みから解放された…」

でも、と心の中で呟く。唇を強く強く噛み締めた。

## 第二章（5） / ……何かの存在を感じる

叔母の死から、何度か季節が巡り、美風は十六になった。

美風は冬になると、毎日のように寄っている叔母の墓に、かつて暮らしていた地に咲いていた、叔母の好きだったあみや亜宮の花を飾るのだった。

制服のポケットの携帯電話が鳴り、美風はさっと手に取り、耳に当てる。

『美風、どこにいる？』

聞き慣れている誠河の声がする。

誠河は下校時間を過ぎてしばらくすると、律義に電話をくれる。

『お墓かな？』

「ええ、誠河兄様」

『お母様が、今日は皆で外食しようってさ。早く帰っておいで』

「はい。ありがとう、兄様」

携帯を切り、ポケットにしまう。

夏に祖父が死に、美風は叔父に引き取られたのだった。

大好きな従兄弟達と暮らせると知り、美風はとても喜んだ。

「お義母様だけでなく、お義父様からも拒否されていたそうね？」

あんな子が新しい娘だなんて……冗談じゃないですわ」

と、気京が流気に言っているのを聞いてしまったが、ともかく。

その時、茶色くて小さい何かが彼女の体を駆け登って来た。

彼女が手を伸ばすと、リスは手に飛び移った。

「あ、大丈夫ですか？」

と、快活な声がした。

「大丈夫です」

自分と同じ歳ぐらいの青年の慌てた様子に、美風は口もとが綻ぶのを堪え切れなかった。

「リス、可愛いですね。ありがとう」



美風はリスを青年に移し、青年の横を通り過ぎた。

青年は美風の明るい茶髪と、制服に目を留めながら、後ろ姿を見つめた。

「なんつーか、ほんとと優しげな子だな」

彼は守芳すおうと言う転校生だった。

優秀で、家柄も非の打ち所が無い。単なる金持ち連中には到底真似出来ない異端児。

「重柳、昨日天使に会ったんだが」

「はい？」

彼を異端とは、親友である重柳は全く思っていないが、品行方正を叩き込まれている重柳から見ても、个性的であるのは確かだった。

長く他国に留学をしていたせいかな？

「お前は、天使に会った事があるか？」

「ええ、いつも会っていますよ」

教室の扉を開ける重柳の後に守芳も続く。

「ほら」

重柳の視線の先を追うと、集まってお喋りをしている女子の中で、一際目立つ容姿の、明るい茶髪の少女がいた。

（あの娘だ）

口に出しそうになって、止めた。

（同じ学校だと思ったが、クラスまで同じだったのか）

ふと、美風が二人の方を向く。守芳を見て驚いたようだった。

「まいったな」

守芳は大袈裟に頭を振った。

「花が咲いてる」

重柳は不審な顔をした。

「花？どこに咲いているんです？あなたの頭の中？」

お前な、と守芳は軽く笑う。

「今は言えないな、後で言う」

「はあ？」

昼休み、重柳は、屋上に通じるドアを後ろ手に閉めた。

「で、花って？」

守芳は、昨日美風に会った事を告げる。重柳は考え込む動作をした。  
「花か：確かに、花と例えるのもいいですがね」

（その花を、あなたはとうするつもりです？）

その問いを口にする事は憚られた。地表を覆う炎が、時折矢のように飛び散り、一帯の星を隠そうとする宇宙の汚れを退ける事から、星座の守り神と言われるティザニツカ星は、年に一度闇に沈む。ティザニツカ星が姿を消し始めた頃、流気邸の屋上に人影が現れ、そつと呟いた。

「私は、宇宙からの人より許されている…」

美風はスツと眠りから覚めた。よく分からない、何かが近づいて来る音がしたような気がした。

「人ではない強力な一族の最後を、私が眠らせてしまった」

抑揚の無い女の声が、ベランダから聞こえて来る。

「起こす為にあなたが必要なのだ」

緊張で一瞬身体を強張らせた美風は、用心深くベランダに近付こうとして、突然、強い力で押さえ付けられ、転びそうになった。

「美風！」

美風の悲鳴を聞き、実家に戻っていた勇潤がすぐに飛んで来た。

「兄様！外に誰かいたの」

続いて誠河も駆け付ける。

「兄さん、すぐに外の様子を見た方がいい」

勇潤はベランダに出て辺りを見回す。がらんとした誰もいない。手摺りを指先で軽く叩く。

「誰もいないぞ」

その時、勇潤はベランダの中央に突き立っている、小さなメッセージカードに気付いた。

「おかしい話ですよね、兄様」

誠河はベッドに腰を下ろし、微笑みながら美風の肩を叩く。

「もう大丈夫だ、心配しないで」

勇潤がベランダから戻って来た。心なしに硬い表情をしていると美風は思った。

「美風、これから夜、外に何かがいると思う事があっても、部屋から外へ絶対に出るな」

美風は勇潤を見上げる。

「はい、怖いから出ません」

「何かあれば、すぐに俺達を呼ぶんだ。召使でもいい。いいね？」  
二人はそつと部屋から出た。

「誠河、見る」

差し出されたメッセージカードを見て、誠河は驚いたようだった。

「これって……」

「外に誰かがいたのは、間違い無い」

女は軽々と屋上に戻り、二人の仲間に報告する。

「最初だから、私達が来た証拠にメッセージだけ、残して来た」

「分かった事は？」

男の一人が、急かすように聞く。

「最初に確認したのは、家族間のトラブルだ」

女の声には憐れみがかすかに混じっていた。

「あの子、心の奥底で、両親を求めているわ」

「両親？いるじゃないか」

「暴力が無いだけで、あの子への愛は感じられないの」

「それで？」

と、もう一人の男が静かに聞く。

「あの子は、お前達には必要無くとも、私達に必要なのだ、だから遠慮なく頂くと伝えた」

美風は、二人が出て行った後、外に何度か何かが見えたり、音が聞こえたりした気がしたが、必死で考え無いようにしていた。流気邸に、不穏な空気が湧き始めた。流気は、気京と共に我が子から事の

成り行きを知ったが、誰かの、性質の悪い悪戯だろうと深く追究するような事は無かった。当の美風は何も知らず過ごしていた。勇潤は大地と翻訳書に向かい、メッセージカードの文字と照らし合わせ、翻訳書の中でも国名不明に分類されている一つに、メッセージと同じ文字を見つけ、解読する事が出来た。そこへ、一地が様子を見に来た。

「一地。お前の翻訳書のお陰でメッセージを解読出来たが、意味がさっぱりだ。文面通りだと、力の源を探している連中がいるらしい。その一つが美風で、頂くと」

大地からも経過を聞いた一地は、顔をしかめた。

「ふむ、まずティザニツカの沈む日に、強いこだわりを感じますな」勇潤はそこで手を休め、少し寂しそうに自分を見つめているしとやかな婚約者、美子<sup>みこの</sup>之に話し掛ける。

「来てくれたのに、構えなくて悪い。狙われているかもしれないのは、俺の妹なんだ」

大体の事を勇潤に教えられていた美子之は頷き、微笑む。

「お側で、お待ちしております」

流気は、勇潤から聞いたメッセージカードの事が、頭から離れなかった。厨房の前を通り掛かった際、真賀太に指示され、皿洗いをしている見慣れない青年に目をやった。

「真賀太、この子は？」

「ああ、田舎から出て来た子ですよ。海と言う名でして。賢そうな顔をしているから、料理見習いで一から教え込んでやろうと思いまして」

父である義明や自分達一家の、お気に入りの小柄なコック。父が死んだので、流気が正式に招いた。

「ふむ、まあいいだろう」

流気は関心なさそうに言った。

「ありがとうございます、旦那様、真賀太様」  
海は深々と頭を下げた。

「では海、皿洗いが終わったら、次はこっちで説明しよう」

真賀太が海を、大きな冷蔵庫の前に連れて行く。

「旦那様の食べ物の三十パーセントは肉で、後は野菜や果物で補う。それから奥様は…」

## 第二章「6」 / ……忍び寄る運命

誠河はその日の勉強に区切りをつけ、何となく厨房に向かった。厳格ながらも自

分や兄には甘い真賀太。美風が来てからは美風も加わった。

「真賀太、夜食を頼むよ」

厨房の奥から聞き慣れない声が響いた。

「すみません、真賀太様は外に出ておりました」

「…君は？」

誠河は声の主を探した。

「はじめまして。海、と申します」

厨房の隅に並ぶ大きな冷蔵庫の陰からモップを片手に、陽に焼けた逞しい青年が出て来た。

「海…」

どこかで聞いた名だ。

「生まれは？」

「火南です」

「火南にいた頃、途中で引越した小さい女の子がいたろう？別れる時、女の子に守り袋を渡した覚えはあるかい？」

誠河が聞くと、青年は目を見開いた。

「その女の子はお守りだと言い、今もそれを手放さない」

「…はい」

海が頭を下げると、誠河は微笑んで言った。

「夜食はもういい。今度君の話を聞かせてくれ。…美風に伝えた方がいい？」

「いいえ」

海は首を横に振った。

「分かった、オヤスミ」

海は掃除に戻ろうとして、振り向いて誠河の方を見つめた。誠河が

らかけられた言葉が胸に残っている。

「忘れられるもんか、忘れられる筈ないだろう…」

学校の昼休み、理奈穂から渡された、有名なパーティードレスの雑誌を見ていた美風は、肩を叩かれ振り返る。

「うーん、やっぱり美風は可愛い」

「な…」

守芳は後ろから手を伸ばすと、美風が見ていた雑誌をめくる。

「この子…こっちの子も中々…けど、美風の方が可愛い」

「あ、りがとうございます」

守芳がもどかしげに、美風の手の側に自分の手を置く。

「今度開催されるパーティーでは最初に、僕と踊ってくれるだろう？」

「ええ、もちろん」

「踊るついでに抱きしめたいな」

「構いませんよ」

「本当に？」

「えっ…ええ、仲良しですから」

「勢いで、手がどこに伸びるかわからないけどそれでもいいかな？」

「そう…ですか」

美風はさっと立ち上がる。

「おいおい、何で逃げようとするんだ」

「そう言うわけではありません」

美風は心の中で呟いた。

（私は…私は…どうしたらいいんだろう？守芳さん、守芳さんは何を考えているの…）

パーティーの当日、守芳は美風の一族に近づき、ふと膝をついた。

「手伝おう」

勇潤が気付いて助け起こす。

「助かりますよ。僕は守芳です、大好きな勇潤兄様」

守芳は軽く美風の口まねをして、握手を求めた。

「守芳君か。守芳君は、顔がいいから割にモテるだろう?」

「勇潤さんに言われても…まあ。勝手に寄っては来ますから。ただ、彼女達が困るんですけど」

「何故?」

「僕の取り巻きに性質の悪い連中がいるんですよ。物を売ったり、逆に誘ったりする…」

一方、海は手伝いとして、真賀太と助手達と共に、会場の厨房に他の名家のシェフと打ち合わせをする。このパーティーの、特に料理の準備は数力月前から行われていた。海は荷物を両手に抱えて、指定された場所に何度も運んだり、掃除したり、片付ける。

「…すごい世界だな、何もかもが村と違う」

呟いた時、後ろから声がした。

「いつかの新入りだな」

振り返ると流気だった。

「はい、旦那様」

「む…ならちようどいい。人手が足りないそうだな、君には、会場で飲み物を配る仕事をしてもらおう。意外と重要な仕事だから、注目されるだろう。真賀太には伝えておく。失敗はするなよ」

「はい、旦那様」

「お一人ですか?」

門柱に寄り掛かっていた美風が振り返ると、守芳だった。

「ずっと、待っていた?」

美風は少しふくれた。

「重柳さんや他の方も声をかけて下さいましたが、あなたと最初に踊るって約束しましたから」

美風は広間へ続く道を進みかけ、振り返った。

「行きませんか?」

「もちろんさ。だが、もう少し二人でもいいんじゃないかな」  
美風は軽く溜息をついた。

「それは無理です、兄様達が見てるから」



それは残念だ、と守芳は笑う。

「どうぞ」

会場へ入ろうとした二人の間に、同じ歳ぐらいのボーイが現れ、飲み物を差し出す。

「ありがとう」

美風はホッとして飲み物を取り、何気なくボーイの顔と名札を見て、ハッとした。

「あなた…海と言うの？」

青年が苦笑した。

「はい」

「お生まれは？」

「すみません、仕事中ですので」

「そうだよ美風。彼の邪魔をしてはいけない」

守芳も苦笑して、美風の隣に立つとボーイの方を向く。

「君、早く自分の持ち場へ行きたまえ」

「はい、申し訳ありません」

青年が一礼し、美風に背を向けた。

「海、待つて」

美風が、背を向けた海の服を掴もうとしたその時、会場の明かりが一斉に消え、真っ暗闇の中、何者かが彼女を押さえつけた。美風は、見えない誰かがいると感じた。

「予告通り、彼女をもらいに来たわ！」

「え？」

美風は暗闇の中、目を見開いた。髪やドレスが、風にはためくように動き、何かに締め付けられるように息苦しい。

「美風！」

異変に気付いた海と守芳の声がした。

「来たか」

勇潤は、連中が美風を連れに来た時に、下手に抵抗すると彼女を攻撃されるのでは無いかと、連中が自由に動けるよう、わざと扉を全

て開けていた。勿論警備員を置いて警戒を怠らなかったが。警備員を連れ、急いで美風がいた場所へ走る。それに呼応するように明かりが一斉についた。

「勇潤さんっ」

一足先に現場に着いた美子之が、艶やかなドレス姿で拳銃を構えたまま立っていた。

「どうだ？」

美子之は動揺していた。

「それが、美風さんは消えましたっ彼らと警備員以外どこにも、誰もいませんでしたわ！なのにつ」

### 第三章「1」 / …さらわれた先は

猛烈な風の音と感触に、美風が目を開けると、見知らぬ女に抱き抱えられていた。辺りは暗く、空には満天の星が広がる。

「あ、あなたは…」

ぼんやりと美風が呟くと、女が美風の方に顔を向けた。

「あのう？」

ふつと女は微笑んで、

「ほらあなた、いきなり空を飛んでいる気持ちはどう？」

美風は、女があまりに綺麗なのと、意識がはつきりしないので夢かと思った。

「ああ、怖いけど楽しいわ」

美風が答えると、美風から見えない場所からくつくと男の忍び笑いがした。

「小娘がそれでは、助ける為に我々を追ってる連中は甲斐が無いではないか」

「追われてるなら、顔、隠さなくていいの？」

美風を抱えている女は星空に目を向ける。

「私はこの美しい顔をウリにしているの。隠したら意味無いでしょう？んーあなたはねー洗練されてるとは言い難いけど、人目を引く容姿なのは確かねえ」

はあ、と美風は応える。

「海…元気でな、頼んだぞ」

寂しさを含んだ声を出して、真賀太が海の部屋へ来た。大混乱と化した会場が鎮静化された直後、美風が掠られた事が公になった。警察が搜索を始めたが、勇潤は、父親から美風を捜す意志が全く感じられない事から、搜索を適当に打ち切るであろう事を既に見抜いており、独自に搜索しようとしていた。

「その荷物…一人で追いつけるつもりなのか」

と、真賀太。

「はい。それが、私が勇潤様に希望した事です」

「海がパーティーに客として来れるよう計らえばよかった、君が客としていた方が、美風は喜んだだろうに」

真賀太の後ろから出て来た人物、勇潤を見て海の顔が綻ぶ。

「あなたは彼女の事を、いつも大切に考えて下さっているんですね」  
勇潤は穏やかに微笑み、

「そうだ。だが俺だけじゃない。特に俺は、美風が好きだからな。  
従兄妹の、妹の域を越えて、いつの間にか」

「勇潤ぼっちゃん……」

真賀太が更に寂しそうな顔をした。

「身近な人間を愛するのは、ごく自然な事ですよ」

今にも飛び出しそうな海を勇潤が引き止め、冷静な口調で言った。

「海、俺には婚約者がいる。…大事な…だから、俺は行けない。俺の代わりに君が行ってくれ。情報と費用を保証する」

海は荷物を抱え、二人の前に立つと頭を下げた。

「お世話になりました。ここで親切にして下さった方々の恩は忘れません」

勇潤の部屋に、美子之が呼ばれた。後ろから大地に手を引かれた由子真がちょこちょこついて来た。普段、暇があれば遊んでくれたり、話を聞いてくれた海がいるのを見て、由子真は顔を輝かせた。美子之は海に、用意しておいた飛行機のチケットを渡した。予め犯人達について知っている限りの情報提供はしている。由子真は不思議そうな表情を浮かべた。

「え？海？どこに行くの？」

「美風お嬢様を探しに行きます、お元気で」

「由子真も海と行くわ！美風お姉様を助けるっ」

由子真が海の服を掴んだ。

「あたし、犯人の会話を聞いちゃいましたのよ。知りたいでしょ？  
ね、海？」

会場が暗くなった時、由子真は会場にこそ入れ無かったが、偶然犯人達がいたすぐ側の柱の裏に隠れていたのだ。

「由子真。君をここに呼んだのは、君があの時見た事と聞いた事を直接話して貰う為だ。美子之にも話さなかったのだから…さ、餞別に話さない」

と、勇潤。

「覚えていませんわ、勇お兄様」

「由子真」

「由子真お嬢さん、何を見たか、全く覚えていない？」  
海が割って入った。

「…見てはいないわ。暗闇で話し声と笑い声を聞いたから、それが気になっただけなの」

「どんな声でした？」

「聞き取れたのは『これはゆゆしき問題だからな』『本当に恐ろしい…』『必ず天罰が下る』って言葉だけですの」

由子真はしゅんとうなだれた。

「十分です。ありがとうございます」

勇潤は、再び口を開いた。

「海、君の希望を優先したいが、やはり一人で君を行かせるわけにはいかない。美風を掠ったのが国際犯罪組織ワァーディテル（宇宙からの人）のメンバーではな。そこで、彼を選んだ」

言って、勇潤が示したのは大地だった。

「もちろん、もちろん構いません」

大地が挨拶をする前に、海は大地の手を握った。

「大地さん。宜しくお願いします！」

「海君、宜しく」

大地は少年を改めて見つめた。大きく、凛々しくなった。

### 第三章「2」 / …さらわれた理由

一行は予め用意されていた船でラエフィロ国（他国と交流がほとんど無い）のエヤイラド宮殿へ続くトンセラン川を遡り宮殿へ向かう。途中、多数の頭蓋骨が川の周辺に放置されていた。船に着くまで美風を抱えていた長身の美女はワーディテルのユニオーと名乗った。

彼女は既に手紙を送ったと言った。ラエフィロのレタゼツフ王にだ。王は状況をどう見たのかワーディテルの一味と正式な面会を許可した。美風は一見ドレスに見える幅の広いズボンと上着に着替えさせられた。若い娘の魅力を引き立てるように、体に合うように作られている。一方、またたくまに宮廷にワーディテルの噂が広まる。ユニオー達は武装し、他国からの客人と同等な対応を要求したが、賢い事にラエフィロの慣わしには従った。美風を除くユニオー、縮れた金髪で鋭利な傷があちこちにある恐ろしげなラチワーニ、色白でひよろりとした身体、前に垂らし、部分的に刈り上げた黒髪が特徴的な眼鏡のセフバの三人は、役人から細かい質問を受けながら王との会見を待った。そして待ちに待った会見の時間、ユニオー達は王に礼をせず、胸を張ったまま会見にのぞんだ。

「何千年と人々が手を合わせて来たその対象が、お前達の仲間の何者かの手により傷つけられ、眠らされた。彼には数々の信仰の源が込められていると言うのに！」

途端、王は悲しそうな目をして美風を見遣り、近くに来させる。

「彼は…眠ったままなのだ。お前も、目覚めさせられる力なのだな？」

美風は、お前も、と言われた事に違和感を感じながら王の前に膝をついた。

「その方がそうだったのは、どなたのせいでしょう？」

「ふむ？」

「私の力は、害を与えられた者から害を奪い、害を与えたものに跳

ね返す力です…」

そして、病のように、跳ね返る相手がなければ私に。と美風は心の中で呟く。それが一地の意見だった。

「ワーディテルの能力者達よ、話しが少し違うのではないか。お前達にもリスクが大きいようだ」

「王の依頼を受けた総裁自らが網を張り、触れた力を我々に伝え、探して連れて来るよう命じた。それが彼女だ。我々は神聖な役目を立派に果たした」

と、不機嫌そうなラチワーニ。その言葉で、王ははっとしたようだった。

「…そうだ。彼が心身に受けた傷を取り除く力を持つ者が必要なのだ…どんな代償を払ってでも」

会見後、成る程なあ、とセフバが無表情で言った。

「小娘の力を使うなら、一部ワーディテルのメンバーが眠らなければならぬと言う事か」

ユンオーは、美風が震えているのに気付いた。

「美風、怯えてるの？」

「王様が、怒ってて怖かったわ」

ユンオーは慰めるように、美風の肩を叩いた。

「ええ。けれどね、それも仕方のない事だわ。眠らされたのは宇宙から贈られたこの星の宝物なのよ。それが眠らされたのよ？黙ってられる方がおかしいわ」

美風は詳細が分からないまでも頷き、話題を変えた。

「ユンオーにはどんな力があるの？」

美風はユンオーの背後にいる二人にも目をやる。

「何かを覆っている空気に触れると、そこに混ざっている記憶がわかるの」

「どうして分かるの？」

「とても簡単な事よ。あった事を感じるだけだもの。あなたの視点から過去を見せて貰ったわ。…悲しかったでしょう」

美風はユニオーから少し離れ、俯いて複雑そうな笑みを浮かべた。

「んー…すごい」

楽しい事も沢山あったのだけど。と遠慮がちに付け加えた。

「だから、私にとつては自然な事なんだもの。私は感覚を磨けば、誰でも身につくと考えているわよ？」

「そう…なの？」

ユニオー達は、美風を王から指示された部屋に案内し、その場を離れた。さてと、とユニオーは豊かな金髪をかき上げた。

「奴は着いたのか？」

と、ラチワーニ。

「先程心配がしたよ。そう心配しなくても、約束は守れるでしょ」と、セフバが苦笑して言った。

「ん？お前に分かり、俺が分からないとはな」

「際だつてるのは美風含めた二人ね。けど、二人は全然タイプが違うわ。一方は可愛い、片方は美人。その他は普通…と。とにかく美風はお嬢様らしく、気品ある姫にならなきゃね」

「ユニオー様、ただ今到着しました。美風と言う娘は？」

振り返ると、自分と似た金髪の青年だった。



### 第三章「3」 / ……救いの本

「美風はこの部屋にいるわ。彼女を頼んだわよ、エトウ」

「ユニオーはすぐ近くのドアを指差して、ラチワーニとセフバを連れて早々に本拠地へ引き上げる。」

「エトファドース、羨ましい役だな。可愛いお嬢様のお守りだ」

「しつかりな、と、ラチワーニはからかうように言って、すれ違いざまにエトファドースの背を一度叩いた。」

（……私は、どうすればいいの？この先、何があるの？）

「たいした説明をされていない美風は、目まぐるしい環境の変化に、わけがわからず焦っていた。」

「ミカゼ？」

「聞き慣れない声がして振り返ると、部屋の入口に黒い服を纏い、軽く武装した長身で金髪の雄々しい青年が立っていた。美風の名前の発音が違った。」

「あ……あのう？」

「エトファドース」

「あら。私は美風です、私の言葉、分かりますか？」

「目を閉じ、少し考えたエトファドースは再び口を開いた。」

「分かる。話せるから」

「美風はほっとした。ユニオー達は流暢に美風と話していたが、宮廷の人間や王の言葉は美風が知る言葉ではなく、初めて王と話した時も、必要な場合のみセフバが通訳してくれていた。」

「エトファドースは……発音合ってるかな、ユニオー達の仲間でしょう？ユニオー達がいらない間、私と一緒にいてくれる仲間が来ると聞いたの」

「……そうだ」

「美風はほんの少し安心した。彼は、この心細い状況で美風が頼りに出来るかもしれない人物だ。」

「エトファードース。あだ名をつけてもいい？あなたが嫌でなければですけど……エトフ

アって呼んでも怒らない？」

「……好きに」

本来他人とあまり関わらないエトファードースは、少し話ただけで分かる美風の無垢さに内心困惑気味だった。与えられた使命は、この星の宝が妻を選ぶまで妻候補の一人である彼女を影から見守り、必要ならば手を貸す。と言う内容だが、それだけではいけないようだ。

「ではエトファ、教えて下さい。私の体には一体何があるの」

美風は何かに追われるようにエトファードースに近づく。

「俺や他の人間には無い力」

美風は小さく溜息をついた。

「誰もが力と言うわ」

成る程、とエトファードースは苦笑した。

「お前は強い力を持つ、だからこそその能力に気持ちから負けていてはダメだ」

「どうすればいいの？」

「気持ちをまず安定させる。この状況では難しいだろうが…これを「本？」

問うとエトファードースは肩をすくめる。

「この国では、これに書いてある内容で、気持ちを安定させる人間が多いそうだ」

美風は笑い、

「いい本を、ありがとう。あなたはこれを読んだの？」

エトファードースはいや、と首を振る。

「本など、まともに読んだ事が無い」

それ以外の資料や問題集やマニュアルならば嫌と言う程読まされ、覚えさせられたが。

「あら、そうなの？いい本を読むと豊かでいい生き方が出来て、あ

あなたが言ってくれた通り、気持ちが安定してられるわ」

そうか、とエトファードスは美風に背を向けた。

「今は、ゆっくり休むがいい」

美風は彼の腕に手を伸ばした。不安げな力で、かつ冷たい。

「美風？」

「エトファは忙しいのですか？」

「忙しくは無いが……？」

美風ははにかんで言った。

「お願いします、書いてある文字が読めませんから、教えて下さいな」

エトファは心の中で、決して不快ではない困惑が、一回り大きく変わったと感じた。美風はエトファードスに渡された救いの本ルートバインと題名の本を、彼と共に読み始めたのをきっかけに、ラエフィ口国で夢中で勉強をした。美風は彼と最初に会った日に、これから何があるかを聞かされた。まず美風は自分と関わる人間や、関わる予定である人間の名前や評判、立場をエトファードスや身の回りの世話をする女中達から可能な限り聞いて覚え、自分と同じ立場である、宝の妻となるべく集められた娘達にももちろん目を向けるようにした。他にもダンスを習ったり、お菓子作りをしたりと活発に暮らした。（俺にとっては不思議な……。外見も中身もいい女）

ある日、王宮の空き部屋での訓練中、美風から彼女の作ったお菓子を受け取ったエトファードスは、長椅子に座った美風の隣に座った。最初と比べ、幾分和らいだ目には安らぎと慈しみの色を滲ませていた。

「お前に生を与えた、お前の、両親の事を聞きたい」  
すると、美風の目が涙でいっぱいになる。

「実はお父様、お母様と呼ぶ前に命を無くしてしまったの……あの、ごめんなさい、暗い話はいけませんね」

美風は涙を拭き、無理矢理笑顔を作る。

「俺が、お前が話す事を嫌がると勝手に決めて、辛い気持ちを、こ

の俺の前で笑いでごまかすのか」

美風と最初に出会った日の夜。エトファードスの夢に美風の父親、流が出て来て、自らが殺された事件と、妻が後を追った場面を告げた。エトファードスは夢の中で彼と妻の遺体の周囲を歩き回って事件を感じた。赤ちゃんである美風の、泣き叫ぶ声がどこからか聞こえた。

「美風…を覚えているか？」

エトファードスの問い掛けに、流は頷いた。

『愛しているよ娘を。妻の水経すいけいも妹の優風もだ。これから多くの変化があるでしょう、あの子を頼みます』

「エトファ……？気分を害させて」

ごめんなさい、と言いかけたところで、エトファードスが口を挟んだ。

「美風聞け、お前にはこう言おう」

「はい、エトファ」

エトファードスは普段から夢の事は口に出さない。だが、何らかの形で彼女を励ましたかった。美風の父親の霊の言葉で彼女を守る気持ちが増したし、彼女が宝の妻として相応しい、と信じようと思った。

「お前の家族は、お前を失ったら大損害だな」

「はい？」

「死んだ父母は勿論、故郷でお前を育てた人物、お前と関わった人物も、お前が可愛くて仕方なかっただろう」

「んー……そうでしょうか……」

エトファードスは不思議だわ、と美風は思った。今まで出会った人間には無い温かいものが彼にはある気がした。

「それにお前は、この星の宝の妻となるべく集められた女達の中で、特別綺麗な女である事に変わりはないからな」

美風は頬をほんのりと染め、目を見開く。

「嬉しいです。エトファは、褒めてくれてるの…ですね？」

エトファードースは頷いた。美風は溜息をつき、エトファードースに寄り掛かった。

「父様、母様、叔母様、兄様……海……みんな……淋しいよ」

美風は言って、黙って側にいてくれる彼を見上げる。エトファードースは、そう言えればいい、と頷く。大地が海と共に、ワーディテルについて長年調査している国、ウブルシアンを訪ね、調査機関に入った時、海は突然立ち止まった。

「海、どうしたんだい？」

言って大地は落ち着かなさそうにしている海を見た。

「美風の声が聞こえる」

海は寂しそうに笑む。

「そんな気がしました」

### 第三章「4」 / ……交流

美風や宝の妻候補である娘達が着替えさせられたのは、シンプルで上品なドレスだった。全員が着替え、化粧と小物で飾り立てられた後、宮殿の大広間に集められた。周囲には、自分達に近づく老若男女の集団。

「ニーナちゃんすごい！綺麗！」

響き渡る甲高い声に、違和感を感じて戸惑う視線が集まる。

「レジルテさん……」

ニーナと呼ばれた娘が、すぐ近くに來た女に愛想笑いを浮かべた。

「ニーナちゃんがいるとブスばかりでつまらないここが楽しい！」  
常識外れな発言に、啞然とした空気が満ちる。

「何だあれは？」

エトファドースは、近くの娘達と何かを話している美風に目をやってから更に言葉をつけ加えようとしたが、肩を掴んで來た男に阻止された。

「あああれ？レジルテのさ、いつもの下僕作りじゃないか。相変わらずお気に入りは最初に気持ち悪いぐらい褒めて褒めちぎるなー俺も真似なきゃ」

ようつエトファドース。と、エトファドースと同年代の男。

「ちよつとシンクニオンさん、どう言う事？」

「いや、その……冗談だよ」

「ところで宝の妻はあのニーナってコに決まったの？」

シンクニオンは自らの守る対象である、宝の妻候補の一人マブアケスの揺らめく赤い髪と黒い目を見つめ、宥めるように言う。

「そんな嫉妬するなよ。まだ分からない。宝の妻は俺が守る君かもしれないし、レジルテが守るエルテニーナかもしれないから」

「ふーん。あのテンションの馬鹿高い女がレジルテ？」

「ああ。これから出て来るディナレカいわく類い稀な卑しい魂を持

つ女」

シンクニオンはこれまでレジルテとなるべく関わらないよう用心してきた。シンクニオンが幼い頃、生物が持つ魂の質を見る事が出来る盲目の母、ディナレカが新参者のレジルテに言い放った言葉を忘れた事が無かった。

（あなた、類い稀な……卑しい魂）

（ええつとゝ類い稀な癒し系？）

（違う）

レジルテからシンクニオンを庇うように立ち、母が首を横に振る。

（は？え？）

見る見る内にレジルテの頬が怒りで紅潮する。

（ちよつとひつどおおい！何が卑しいよ！何が卑しいよ！）

エトファドースは、可憐な笑顔で周囲を魅了している美風に話しかけた。

「美風、ちゃんと楽しんでいるか？」

「え？とても楽しいわ。こうして皆で集まって……」

美風は笑って周りを見渡した。

「それは雰囲気か、だろう？美風はまだ遊び足りてない」

「そ、そうでしょうか？」

少し戸惑った美風を見てエトファドースは微笑む。

「ふうん。あなた、案外喋る方なのね」

エルテニーナの声が割り込んで来て、美風はびくつとする。

「お前の思い過ごしだ……」

エトファドースが美風に対する時と打って変わった声を出す。

「固い人ね」

ふふつと楽しそうな声を受けてエトファドースはエルテニーナに背を向けた。

「お前のほうこそ、簡単に人に心を許すようには見えん」

「ふふつ……そう？あなたには違つかも」

「その子がエトウ坊やの？」

エトファードースはレジルテの声を無視して、美風やシンクニオン、マヴァケスを連れて立ち去ろうとする。

「ねえあなた、私すごく言いたかったのだけど……」

「はい？」

「笑わない方がいいわよ。笑った顔が気持ち悪いから」

レジルテが美風にしつこく絡もうとする。

（さて。彼女の為に何をしてやればいいのか……）

シンクニオンがレジルテに耳打ちする。

「俺は美風ちゃんの方がエルテニーナより可愛いと思うし……好きだな」

マヴァケスが手を叩いた。

「上手い事言うわね、シンクニオンさんは」

「あらシンクニオン、マヴァケスさんも、あなた達に興味は無いのよ」

レジルテが美風に向かい声を張り上げた。

「何よちよっと可愛いって褒められてたからっていい気になって…

…不細工じゃない。ニーナちゃんには誰も敵わないのよ！」

エトファードースが労るように美風の両耳をそつと塞ぐ。

「相変わらずの醜態ぶりだな。男と金の亡者が」

シンクニオンが呟く。

「それってユニオーのこと？ねえエトファードース。あなたの大事なユニオーは大変な男好きなのよねえ。何たって」

「ユニオー様は、お前と何もかもが違う」

レジルテが馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「あちらに行きましょ、ニーナちゃん」

「ねえあなた」

マヴァケスが、レジルテの後に続こうとしたエルテニーナの腕を掴んだ。

「あんたは、この人の振る舞い恥ずかしくない？」

エルテニーナは薄笑いを浮かべ、掴まれた腕を振り払った。



「さあ。私は深く考え無いから」

「もーニーナちゃんたら賢い！私、ニーナちゃんがいいいや」  
レジルテとエルテニーナが離れて。

「シンクニオンさんこれを。使って下さい」

美風は近くの椅子を差し示した。

「君みたいな美人に心配されて、ありがたいな」

言いながら腰かけ、マヴァケスに話しかけられて応じる美風を眺めた。

（それにしても綺麗な子だ。エトファードスの言う通り素晴らしい）  
レジルテは、飲み物が注いであるグラスが固まって置かれているテーブルの前で止まった。さっと周りを見回し、不愉快な連中がいない事を確認した。

「なあんで私、いつも悪く言われるのかなーねえ？」

傍らのエルテニーナに目を向けると、エルテニーナはさっと金褐色の髪を払った。

「ふふっレジルテさんたら」

「あなたの全てに嘘があるのよ。美貌にも、言葉にも」

二人は驚いて声の主の方を向いた。エルテニーナは両手を握りしめた。長身でセクシーで気品のある美女、エルテニーナは自分がいくら努力しても、彼女を越えられないと感じた。レジルテは苛立ち、ユニオーに向かい声を荒げた。

「いいってユニオー。あなたもういいから私に構わないで」

それは私の台詞、とユニオーは心の中で呟いた。かつてレジルテはことごとくユニオーと同じ化粧、同じ服装や持ち物にこだわった。

ユニオーは質の悪い自分がもう一人作り出されるような、異様な感じだった。彼女は非常にしつこかった。小さな事でも長い間根に持つのだ。もう過去の嫌な事はあつと言う間に忘れちゃった、と言いつつながらあの時あったこー<sup>にきた</sup>だったと何かにつけ蒸し返す。

（実はねえユニオー、二基<sup>にきた</sup>太さんからプロポーズを貰ったの。彼を落とすのにベタベタ触りまくって、服も、うっすーいの着ちゃった。

彼の方がルンドフィより稼ぎもいいし、どうしようかしら？)

(何をムキになっているの？)

(ムキになんか……！)

(相変わらず、男性の目しか意識してないのね)

(そうよ。私は頭の中から爪先まで完璧にしないと気が済まないの。こんな事、あんまり言いたくはないけど……女の目なんか意識していないわ)

「ユンオー？」

三人が声のした方を向くと、槍を構えた四人の男女の兵士の中央に、目を閉じたままの白いローブの女がいた。女に呼ばれたユンオーは安心したように、すれ違いざまに軽く彼女の手を握った。

「行つてらっしゃい、ディナレカ」

### 第三章〔5〕 / …魂の資質

この国、マトウシェヌの中央に位置するチャヴィレイ神殿が  
ディナレカの家であり仕事場である。

この会場は王宮の一部をその神殿に似せて改装したもので、  
目の見えないディナレカも勝手が分かる。

また、ディナレカは視覚以外の感覚が並外れて優れていた。  
演壇に立ち、ライトに晒されながら、ディナレカは各地から選ばれ、  
集められた少女達を更に選定する為に集中し始めた。

全員がディナレカに注目した。

運命と予言の神の声を聞けるディナレカは、この国では有名だ。

一生を神殿からバトジェ神に仕え、国の重要な儀式を手掛けて過ご  
す筈だったが、

息子であるシンクニオンの出産と後継者の出現により変化した。

「魂は……僅かな人生の風や火にも変化する。安定の予想は出来な  
い。」

私、ディナレカに見えるのは魂の心臓部、魂の核……」

言いながらディナレカが蠟燭を持ち、娘達の間を縫うように歩いて  
行く。

「……ダメ、憎しみに満ちた魂」

そう言われた少女が、脱力したようにその場に座り込んだ。

「問題外。汚れた魂」

真の宝の妻候補は十人前後になると聞いた。

選ばれても選ばれなかった場合も、無事に帰る事だけを考えようと  
美風は思った。

「命あるもの全てを監視し、役目を与える魂」

と、ディナレカが近くの娘の肩に手を置いた。

二人の男が近付くと非常に丁寧に別の部屋へ誘導した。

「悪魔の力に対抗出来る魂」

と、ディナレカがマヴァケスを示す。

驚いた顔をしたマヴァケスに、先程と同じく二人の男が近付き、別室へ。

「聖なる香り漂う魂」

と、ディナレカと男二人に上品にお辞儀をする娘。しばらく選定が続き、

「人の苦しみ、悔しさを知らず喜びに満ち溢れた魂」

と、誇らしげな表情のエルテニーナも別室へ。

「暗い道で行き先を教える、優しい光そのもののような魂」

と、周囲の女性と比べ幾分幼い無表情な少女。

ディナレカが近づいて来る。彼女には不思議な威圧感があると美風は思った。

「失われ行くものを護る魂」

と、ディナレカが美風を示す。

少女達の間を抜けて二人の男が近づいて来た。

二人は他の少女達と同様、丁寧に美風を別室に誘導した。

扉が開かれる。

部屋は薄暗く、美風は一步踏み出して何かに躓き、バランスを崩して少しよろめいた。

後ろで扉が閉められる。

「あの人は……」

全身からかすかに光を放つ、肌の黒い長身で中性的な男が、決して広くはない部屋中に根を張った巨大な水晶の樹の中で眠っていた。

流れるような、非常に長い銀の髪が綺麗だなと思う。

ふと気付くと、よろめいて咄嗟に手をついた箇所も水晶の樹の一部だった。

数分ほどして、娘が一人入って来た。しばらくして、また一人。

今度はディナレカも一緒に入って来た。扉が閉じられる。

「選定は終わった。」

この方が、我が国の宝、そして世界を司る神の宝、神の第三の目だ」  
水晶の樹の向こうから重々しい男の声がした。

見ると、黒い布を頭から被っており、顔はおろか手も黒い手袋をしている。

「はるか昔、人類が歴史を記録に残し始めてからしばらくして、この世の創造主である神の額にある第三の目に己の意志が芽生えた。第三の目は好奇心に負けて人の姿をとると神に無断で下界に降りた。そして再び神に戻る事を嫌い、幸せと救いを求めてさ迷いながらこの国にたどり着いた。

ほどなくして神の使い、あらゆる儀式と封印の神オドバヘスもこの国に訪れた。

第三の目である彼と出会ったオドバヘスはすぐに、彼が痛みを感じず動きを止める方法……

今で言う催眠術のようなもので自らが作った強力な結界……

この水晶のような物体の中に眠らせる事にした」

「催眠は自己暗示の延長、催眠状態は、安心して何かに集中している状態ですわ……」

と、美風の傍にいた娘が小さく呟いた。

「夢にのめりこむのも一種の催眠状態と言われるそうね」

と、マヴァケスの凜とした声がちらつと聞こえた。

黒いマントの男が続ける。

「彼がすぐに眠らされた理由は、彼が、凄まじい負の力を発しており、

全ての命に悪影響を与える寸前だったからだと言われている。

その後、オドバヘスは彼を眠らせたまま神に戻そうとした。

だが、戻す前に……オドバヘスは謎の失踪を遂げてしまい、

第三の目を神に戻す方法を知る者も、オドバヘスの結界を破れる者も、その後現れなかった。

また、第三の目が死ぬと神の力が非常に弱まり、死後の世界などで常に飢えている、

太古に別の次元に追い払った邪悪な魔により世界は滅ぶ。

幸い、第三の目の生命を維持する方法を、オドバヘスと共に実施していた従者がおり、

彼らの子孫である我々が継続している。……君達は、彼の生命維持に必要な人間なのだ」

### 第三章「6」 / …皆に崇拜される存在

「お疲れでしょう、ディナレカ様」

集会の解散後、部屋から出かけて少しよろめいたディナレカを、エトファドースはそつと支えた。

「エトファドースさんですか。私は幼い頃から神の……宝の魂と交信してきました。」

少女達の魂の美しさに、改めて魂の美しさを思い知ります……」

「ええ、よく知っていますよ。……ディナレカ様」

「はい」

「宝は、万能でしょうか」

ディナレカは難しい顔をして、

「恐らく目覚めた宝を欺く事は出来ない。」

宝は声からその生物の感情の波を感じる事が出来るから」

予想通りの答えだった、と言うかすかな無念がエトファドースの胸を打つ。

「ディナレカさん、あの……大丈夫ですか？」

そう言ったのは、いつの間にか近くにいた美風だった。

「ありがとう。大丈夫ですよ。それより、聞きたい事があるのでしよう？」

ディナレカは美風の方に顔を向けて微笑んだ。

「は……はい、私や女の子達だけではなく、例えばエトファドースの魂は……？」

「彼は、護る魂を護る魂……ミカゼ、よね」

「はい？」

「あなたは優しいと聞いているし、それが事実だから心配。」

愛し合ってても、そこに本人達のどちらか、

あるいは誰かの憎しみが入ると悪なるものが目覚める。気をつけなさい」

「何してるの美風！行くよ！」

マヴァケスが呼んでいる。美風ははっとして、ディナレカに一礼して小走りで去った。

ディナレカは美風の足音が聞こえなくなってから、

「あの子とあなた。心底から愛し合っているわ。」

これからの事が辛いなら、元気を出す為に忘れなさい」

エトファドースは表情を変えず、ディナレカが自力で立てるのを確認し、

彼女からそっと離れ、シンクニオンと共に部屋を出た。

歩きながら、エトファドースはディナレカに言われた事を思い返していた。

「ん？何だあれば。えらく光ってる女だな」

その女性が駆け寄って来た。

「ハアイ」

エトファドースは少し下がり、その女性を見つめた。

「エルテニーナ？いつの間に着替えた？一瞬、ユニオー様かと」

エルテニーナは非常に嬉しがった。

「うふふ、シンクニオンたら嬉しい。ユニオー叔母様はいつも素敵だものね。」

ねえエトファドース、私ね、ユニオーさんみたいになりたいの。

どうやったらなれる？親戚なのにどうしてこども違うのかしら、

ユニオー叔母様になれたら、ユニオー叔母様の前に開けてるであろう、

これからの素晴らしい人生を私も歩いていけるかな」

「まず不可能だ、と断言する」

エトファドースがうなるように言った。

「そう……」

「君には、ユニオー様とはまた違う素晴らしい魅力がある、

この時点で君は、ユニオー様と掛け離れているから」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7260f/>

---

癒しの手

2011年10月3日18時24分発行